

まえがき

日本語教育界は異文化交流の最先端にある。日本に学習に来た外国人、働きに来た外国人、ともに日本人の考え方・行動形式にとまどい、カルチャーショックを受けている。

この問題を解決するには、「文化」とは何か、「異文化」とは何か、その定義が研究の前提となる。しかし日本語教育界において正面から「文化」「異文化」を論じる人は少ない。あってもその定義は、文化庁文化政策課編『異文化理解のための日本語教育Q&A』（平成6年刊）の「文化とは何か」にみられるように多種多様である。ただ今日いえることは、文化を日常生活と切り離して高度の科学技術に支えられた上位概念と考えている人と、その国の日常生活・社会習慣が文化であると考えている人とに二分されることである。どちらの立場に立つにしろ、自分の立場を明らかにして文化を考察し議論すべきである。私はICUの学生たちのカルチャーショックが、生活文化そのものであることを実感している。いくら頭で考えても、「異文化」は経験してみないとわからない。ジョン・ロックはいう。「経験、その中にわれわれの知性は築かれる。そして、それから、われわれの知性はたえず引き出される」と。

本紀要には、教材やビジネスにかかわる文化の問題、漢字の字形と認知の問題など、最先端の研究論文・報告6本を収めた。また、特別寄稿「ロシアにおける日本語教育の問題点をめぐって」、及びICUの日本語教育40周年記念論集『日本語教育の課題』の書評を掲載することができた。専任教員の著書・翻訳書の紹介も新しい試みである。

本紀要5号の編集には、飛田良文・稲垣滋子・尾崎久美子が当たった。

1996年3月31日

日本語教育研究センター長

飛田良文